

病害虫発生予察予報第12号（3月の予報）

佐賀県

目次

1. 3月の病害虫	1
2. 気象概要	2
3. 予報の内容・根拠について	2
4. 3月の予報	
果樹（カンキツ）	3
茶	4
野菜（イチゴ、ナス、キュウリ、トマト、タマネギ）	5
花き（キク）	15
5. 病害虫診断状況	17
6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫	18
7. 農薬の適正使用について	19

今月のトピックス

- タマネギべと病の越冬罹病株の抜き取りと薬剤防除を徹底しましょう。
- イチゴのうどんこ病が多発しています。このままでは春先に大発生する恐れがありますので、防除を徹底しましょう。

1. 3月の病害虫（予報で対象とした病害虫の中から抜粋）



タマネギべと病の越冬罹病株



イチゴうどんこ病



トマト灰色かび病



ナスすすかび病

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085

2. 気象概要

【3ヶ月予報 平成25年2月25日 福岡管区気象台発表】

3月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

3月の要素別確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20	40	40
降水量	30	30	40

各病害虫の「予報の根拠」として、上記の向こう1か月の気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。上記の気象予報（確率予報）の内容について、本文中では便宜上、「気温やや高」、「降水量並」と簡略的に表現しています。

【参考】

要素	平年値 (佐賀市)	平年差(比)の平年並の範囲 (九州北部地方)
3月の平均気温	9.9℃	-0.3℃ ~ +0.4℃
3月の降水量	128.6mm	84% ~ 100%

3. 予報の内容・根拠について

病害虫の発生量（平年比）

○予報の発生量は平年（佐賀県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

○留意点として、平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。一方、発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

○予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

果 樹

【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除 のてびきの 記載ページ	備 考
		平年比	前年比		
カンキツ	かいよう病	やや少	並	234~236	
	ミカンハダニ	並	並	259~263	

【特記事項】

- カンキツかいよう病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、発芽前の3月上旬に必ず銅剤を散布する。
- ナシでは、黒星病対策として発芽直前（3月中旬頃）の防除を行う。
- キウイフルーツかいよう病の発生が既に確認されていることから、開花前までの銅水和剤による定期防除と、罹病部位の切除を徹底する。また、本病の未発生園で乳白色あるいは赤褐色の樹液が漏出する等の症状が新たに見つかった場合は、すぐに関係機関へ連絡する（[平成27年1月20日付病虫害対策資料第19号参照](#)）。

カンキツ

（巡回調査日：2月16日～18日）



巡回調査時の生育状況

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

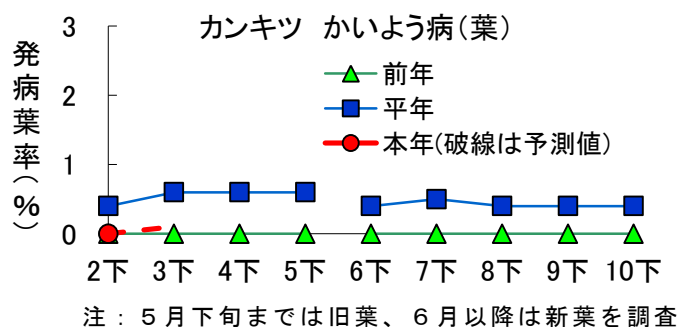
(1)巡回調査では、温州みかんでの発生を認めていない（平年0.4%、前年0%）。<ー～±>

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。<±>

3) 防除上注意すべき事項

(1)カンキツかいよう病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、いよかん、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、発芽前の3月上旬に必ず銅剤を散布する。

(2)発病した枝や葉は今後の伝染源となるので除去する。ただし、強剪定は枝が遅くまで伸長し、本病に感染しやすい期間が長くなるので行わない。



茶

【概要】

作物名	病害虫名	発生量		病害虫防除のてびきの記載ページ	備考
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	並	やや多	418～419	

【特記事項】

- カンザワハダニは、2月下旬頃から3月上旬頃に活動を始める。多発してからでは防除効果があがりにくいため、萌芽前までの防除を徹底する。また、生息部位である葉裏に薬液が十分にかかるよう丁寧に散布する。

茶

(巡回調査：2月16～17日)



巡回調査時の生育状況

1. カンザワハダニ

1) 予報の内容

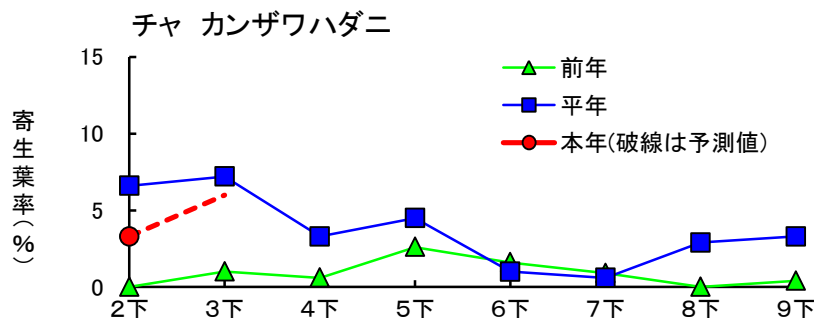
発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- 巡回調査では、寄生葉率は3.3%（平年6.6%、前年0%）であり、平年及び前年並である。〈±〉
- 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）。

3) 防除上注意すべき事項

- 生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。



野 菜

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびき記載頁	備考
		平年比	前年比		
イチゴ (本圃)	うどんこ病	多	多	188～191	平成27年2月26日付 病害虫発生予察注意 報第9号参照
	灰色かび病	並	やや多	191～193	
	ハダニ類	やや多	多	199～200	平成27年1月29日付 病害虫対策資料第22 号参照
	アブラムシ類	並	並	204～205	
ナス	すすかび病	並	並	234～235	
	灰色かび病	並	並	232～234	
	菌核病	並	並	235	
	アザミウマ類	やや少	並	244～245	
	コナジラミ類	やや少	並	243	
	ハモグリバエ類	並	並	246	
キュウリ	べと病	やや多	やや多	166～168	
	うどんこ病	並	並	173～175	
	灰色かび病	並	並	168～169	
	褐斑病	並	やや多	170～172	
	アザミウマ類	多	多	148～149、183～184	
	コナジラミ類	多	多	145～147、181～182	
トマト	灰色かび病	やや多	並	210～212	
	葉かび病	並	やや多	216～217	
	コナジラミ類	並	並	145～147、219～222	
	ハモグリバエ類	並	並	154～155、223	
タマネギ	白色疫病	並	並	272～273	
	べと病	多	多	273～275	平成27年2月26日付 病害虫発生予察注意 報第8号参照
	ホトリフ葉枯症	並	やや多	275	
	ネギアザミウマ	並	並	283～284	

【特記事項】

【イチゴ】

1. うどんこ病の発生圃場では、発病果実等を除去し、硫黄粒剤のくん煙処理を併用するなどして防除を徹底する。薬剤防除の際は、葉裏や株の内部にも薬液がかかるよう、十分量を丁寧に散布する（[平成27年2月26日付発生予察注意報第9号参照](#)）。
2. ハダニ類の発生がみられる場合には早急に防除を行う（[平成27年1月29日付病害虫対策資料第22号参照](#)）。特に、天敵を用いて防除を行う圃場では、防除を徹底し、ハダニ類の発生が認められない程度に密度を抑えてから天敵を導入する。
3. アザミウマ類の発生が見られる圃場では、春先の多発生を防ぐため、低密度時からの防除を徹底する。

【施設果菜類（ナス、キュウリ、トマト等）共通】

1. コナジラミ類やアザミウマ類は、多発生すると防除が困難であることから、低密度時からの防除を徹底する。圃場においてこれらが媒介するトマト黄化葉巻病やキュウリ黄化えそ病・退緑黄化病等のウイルス病の発生がみられる場合には、伝染源となる発病株は早急に抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分する。
2. 今後、暖房機の稼働時間が短くなるため、施設内が多湿条件となり、灰色かび病等の病害が発生しやすくなる。このため、こまめな換気や循環扇を活用するなどして、適切な温湿度管理を行い、結露時間の短縮に努めるとともに、少発生時から薬剤防除を定期的に行う。

【キュウリ】

1. 植え替えを行う圃場では、次作へアザミウマ類を持ち越さないよう、植え替え前の防除を徹底する。

【タマネギ】

1. 気温の上昇に伴い、タマネギべと病の二次伝染が始まるため、3月上旬からの防除を徹底するとともに、引き続き越年罹病株の抜き取りを徹底する（[平成27年2月26日付病害虫発生予察注意報第8号参照](#)）。

イチゴ（本圃）

（巡回調査：2月17日～19日）

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

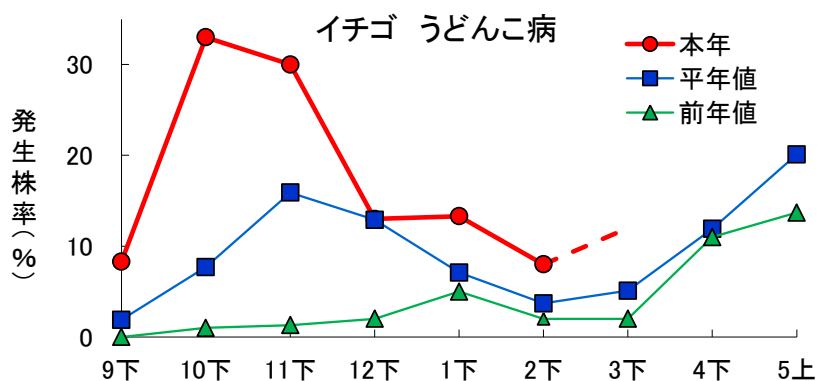
- (1) 巡回調査では、発生株率は8.0%（平年3.7%、前年2.0%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉
- (2) 今作では、育苗期から本圃初期に本病の発生が多く推移したため、圃場内での菌密度は高いと思われる。〈+〉
- (3) 病害虫防除員の調査(6圃場)では、6圃場とも発生が見られ、発生株率は12.3%である。〈+〉
- (4) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏にも薬液が十分かかるように散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) 詳細な防除対策は[平成27年2月26日付病害虫発生予察注意報第9号](#)を参照する。



巡回調査時の生育状況



2. ハダニ類

1) 予報の内容

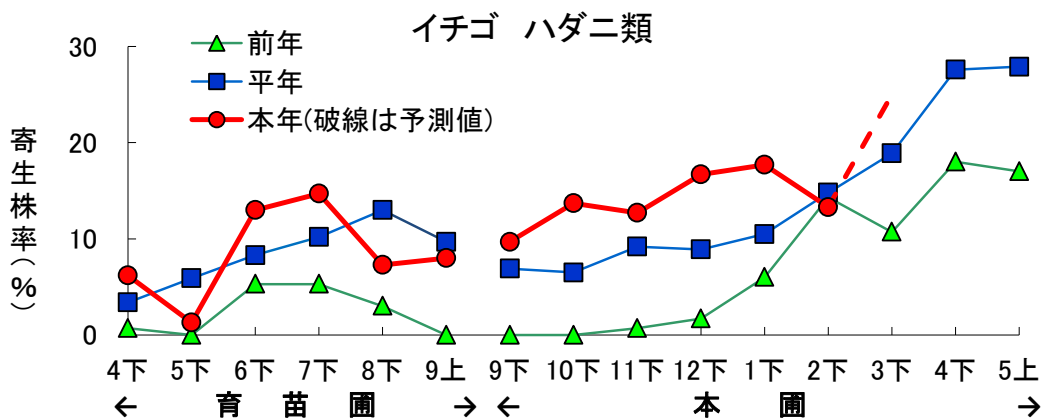
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は13.3%（平年14.8%、前年14.3%）であり、平年及び前年並である。〈±〉
- (2) 巡回調査での発生圃場率は91.7%であり、ここ10年の中で最も高い。〈+〉
- (3) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、6圃場とも寄生が見られ、寄生株率は23.0%である。〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) 詳細な防除対策は [平成27年1月29日付病害虫対策資料第22号](#) を参照する。



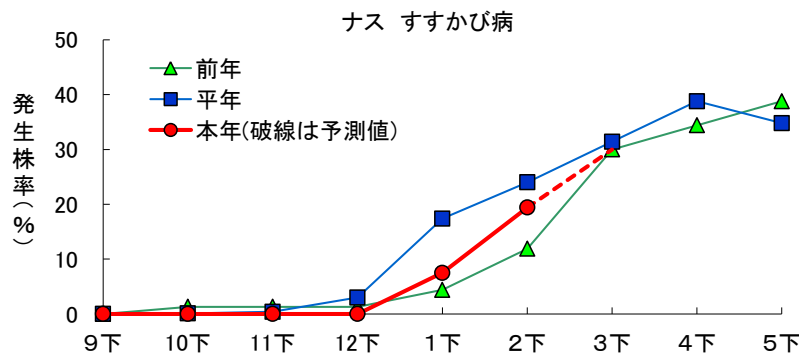
ナス（促成）（巡回調査：2月17～18日）



巡回調査時の生育状況

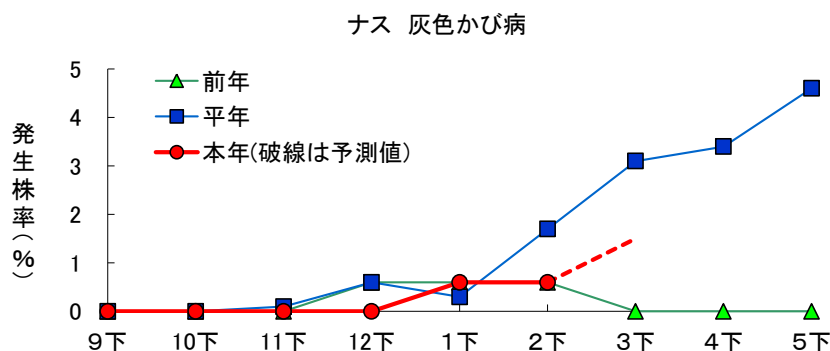
1. すすかび病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1)巡回調査では、発生株率は19.4%（平年24.0%、前年11.9%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉
 - (2)病害虫防除員の調査（6圃場）では、4圃場で発生が見られ、発生株率は11.7%である。〈-～±〉
 - (3)気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)発生初期からの防除を徹底する。
 - (2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. 灰色かび病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1)巡回調査では、発生株率は0.6%（平年1.7%、前年0.6%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉
 - (2)病害虫防除員の調査（6圃場）では、4圃場で発生が見られ、発生株率は4.2%である。〈+〉
 - (3)気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。
 - (2)発病部位は除去し、圃場外へ持ち出し適切に処分する。
 - (3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



3. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

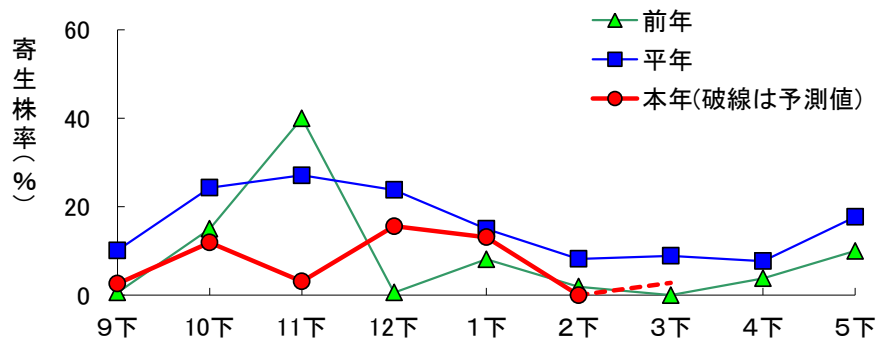
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生を認めていない（寄生株率：平年8.2%、前年1.9%）。〈－〉
- (2) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、1圃場で寄生が見られ、寄生株率は3.3%である。〈－～±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

ナス アザミウマ類



4. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

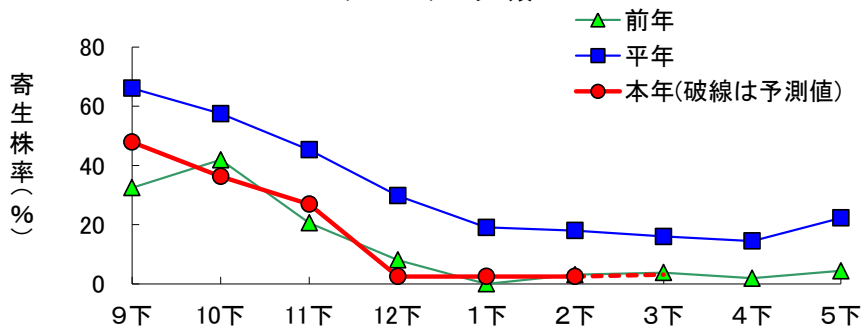
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は2.5%（平年18.0%、前年3.1%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈－〉
- (2) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、2圃場で寄生が見られ、寄生株率は3.3%である。〈－～±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内の密度を下げるため、幼虫寄生葉は可能な限り除去して、施設外へ持ち出して適切に処分する。
- (2) 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

ナス コナジラミ類



キュウリ(半促成)

(巡回調査：2月17～18日)



巡回調査時の生育状況

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

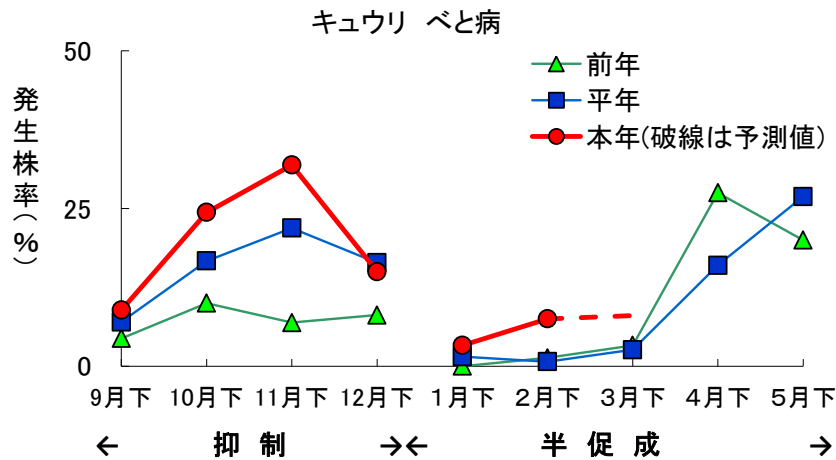
(1)巡回調査では、発生株率は7.5%（平年0.7%、前年1.3%）であり、平年及び前年より多いが、発生は一部の圃場に限られる。〈±～+〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

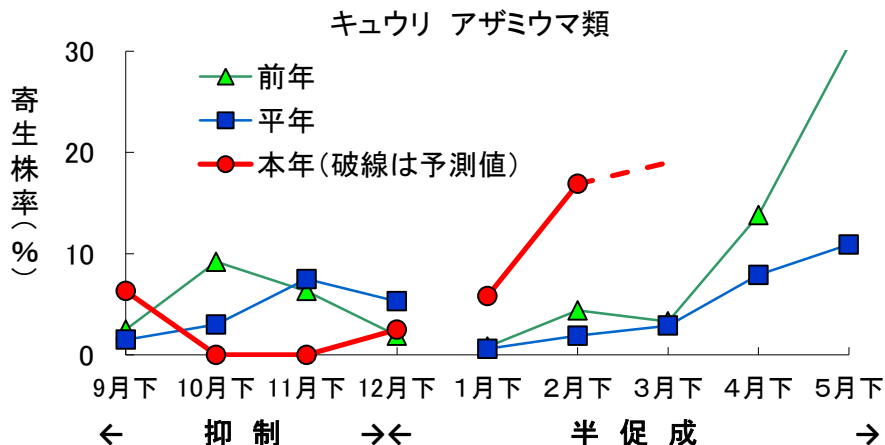
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は16.9%（平年1.9%、前年4.4%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するため、低密度時からの防除を徹底する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



3. コナジラミ類

1) 予報の内容

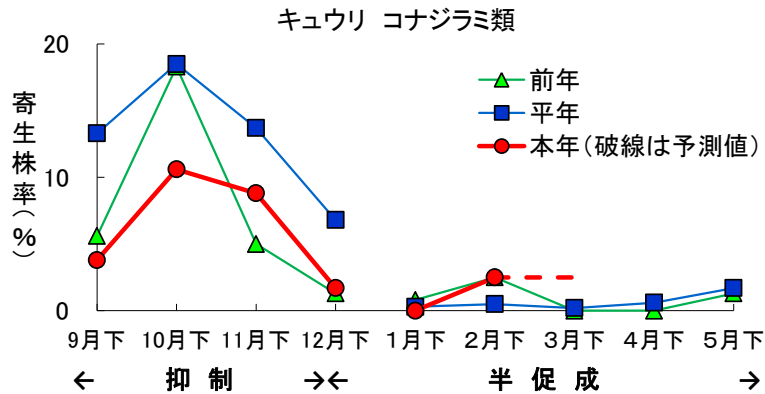
発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は2.5%（平年0.5%、前年2.5%）であり、平年より多く前年並である。〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)タバココナジラミはキュウリ退緑黄化病を媒介するため、低密度時からの防除を徹底する。
- (2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



トマト

(巡回調査：2月17日～19日)



巡回調査時の生育状況

1. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

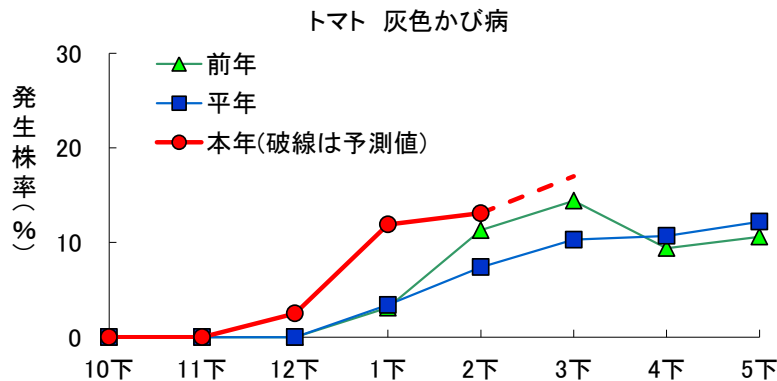
(1)巡回調査では、発生株率は13.1%（平年7.4%、前年11.3%）であり、平年よりやや多く前年並である。〈±～+〉

(2)病害虫防除員の調査（6圃場）では、4圃場で発生が見られ、発生株率は5.8%である。〈±〉

(3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発病葉は除去し、発生初期からの防除を徹底する。
- (2)こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。
- (3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は2.5%（平年3.0%、前年0%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉

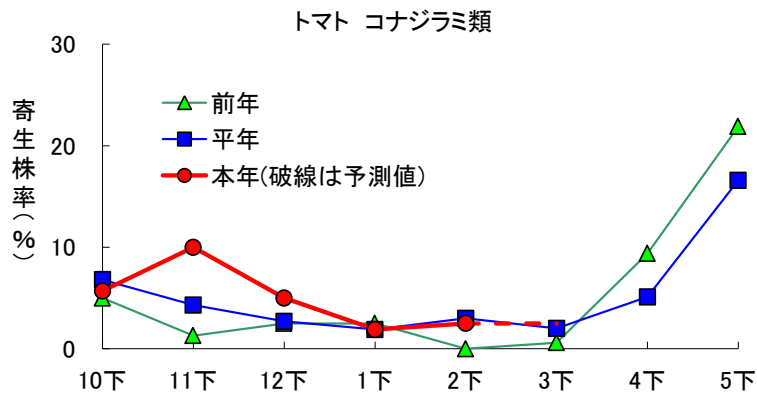
(2)病害虫防除員の調査（6圃場）では、1圃場で寄生が見られ、寄生株率は1.7%である。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)コナジラミ類はトマト黄化葉巻病を媒介するため、防除を徹底する。

(2)幼虫の寄生が多い葉は除去処分し、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう散布する。

(3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



タマネギ（本圃）

（巡回調査：2月18日）

1. べと病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率0.09%（平年0.01%、前年0.06%）であり、平年より多く前年よりやや多い。〈+〉

(2)越年罹病株の初確認日は、早生、露地とも例年より早く（表1）、一部圃場では分生子の形成が認められている。〈+〉

(3)平成26年夏は長雨で経過し、苗床の土壤消毒の効果が十分でなかったと考えられ、苗床で感染した株が本圃に持ち込まれた可能性が高い。〈+〉

(4)近年、多発傾向にあり、病原菌の密度が高まっていると考えられる。〈+〉

(5)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)越年罹病株の早期発見と抜き取りを行う。

(2)越年罹病株による二次伝染が始まる直前（3月上旬頃）からの防除を徹底する。

(3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(4)早生タマネギで早期に発生したべと病が、周辺のタマネギの感染源となる場合があるので、防除対策には地域全体で取り組む。

(5)防除対策の詳細は、[平成27年2月26日付病害虫発生予察注意報第8号](#)を参照する。



巡回調査時の生育状況（マルチ）



巡回調査時の生育状況（露地）

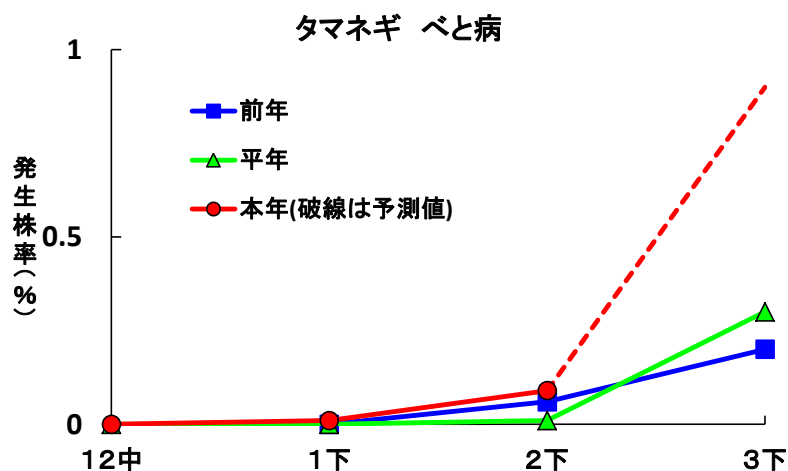


表1 タマネギ巡回調査におけるべと病越年罹病株の初確認日

調査年	初確認日	
	マルチ被覆（早生）圃場	露地（中・晩生）圃場
平成24年	2月28日	3月21日
平成25年	2月7日	2月20日
平成26年	2月3日	2月3日
平成27年	1月26日	1月26日

注) 3年とも、マルチ、露地タマネギを8圃場ずつ調査（各圃場2,000株調査）

2. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

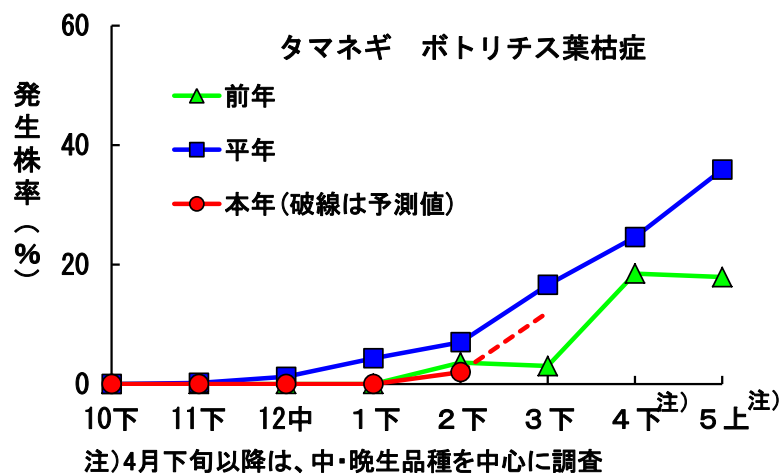
発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率2.0%（平年7.0%、前年3.6%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉
- (2) 巡回調査圃場以外の一部圃場で、発生が多い圃場が認められている。〈±～+〉
- (3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 曇天・雨天が続いた後には、薬剤防除を実施する。
- (2) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統の薬剤を連用しない。



注) 4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

3. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

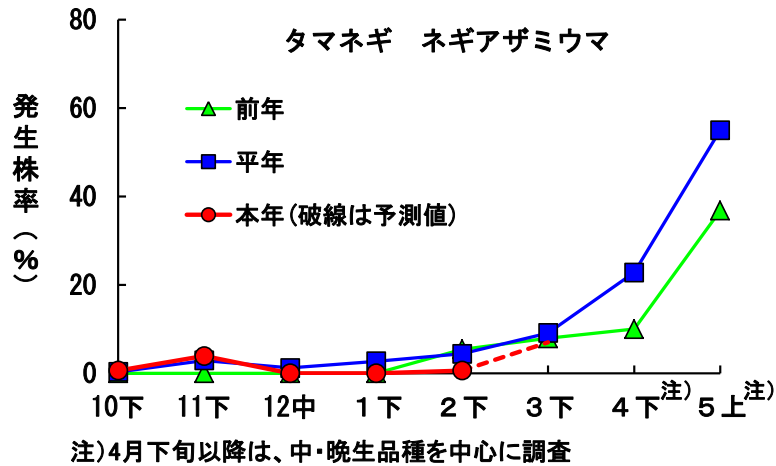
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は0.6%（平年4.4%、前年5.4%）であり、平年及び前年よりやや少ない。〈-~±〉
- (2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±~+〉 〈気温やや高い：±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本虫は薬剤がかかりにくい葉の隙間に寄生しているのので、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統の薬剤を連用しない。



花き

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびきの記載 ページ	備考
		平年比	前年比		
キク (4～5月 出荷タイプ)	白さび病	多	やや多	343～344	
	アザミウマ類	やや多	多	348～350	
	アブラムシ類	並	並	346～347	
	ハダニ類	やや少	並	347～348	
	ハモグリバエ類	並	並	351	

【特記事項】

1. 白さび病は発病してからでは防除が難しいため、薬剤の定期的な散布による予防防除を行う。また、暖房機による送風や循環扇を活用するなどして、適切な温湿度管理に努める。
2. アザミウマ類はキクえそ病、茎えそ病を媒介するため、低密度時からの防除を徹底する。また、伝染源となるこれらのウイルス病発生株は抜き取り、圃場外で適切に処分する。
3. ハダニ類は、今後気温の上昇とともに増加するため、低密度時からの防除を徹底する。

キク (巡回調査：2月17～19日)



巡回調査時の生育状況

1. 白さび病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は12.9%（平年2.5%、前年12.5%）であり、平年より多く前年並である。〈+〉

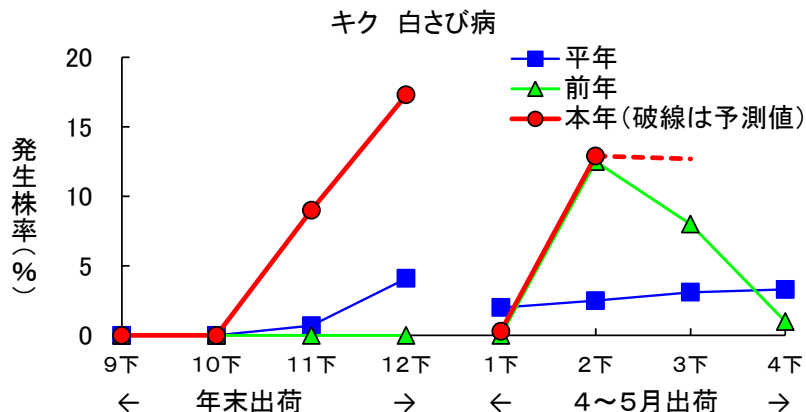
(2)気象予報では並発生条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)発病してからでは防除が困難となるため、予防散布に努める。

(2)葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるように散布する。

(3)暖房機による送風や循環扇を活用するなどして、適切な温湿度管理に努める。



2. アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、クロゲハナアザミウマ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

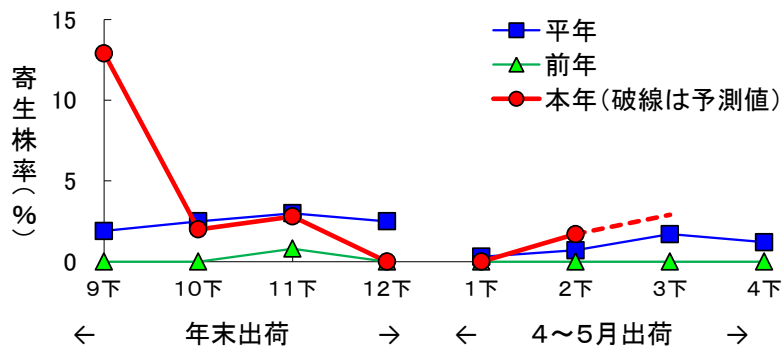
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は1.7%（平年0.7%、前年0%）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生初期からの防除を徹底する。
- (2) 圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。

キク アザミウマ類



3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

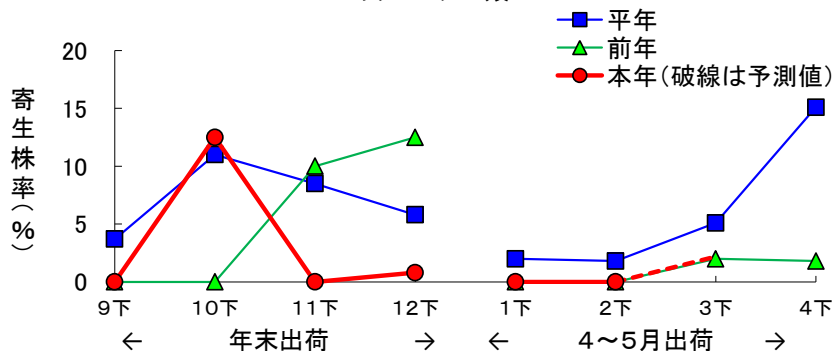
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生を認めていない（寄生株率：平年1.8%、前年0%）。〈-～±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

キク ハダニ類



5. 病害虫等診断依頼状況

平成27年1月21日～2月20日までに農業技術防除センター及び各試験研究機関に持ち込まれ、同期間中に診断が完了した病害虫の診断結果は次のとおりです。

	作物名	依頼件数	診断結果(件数)
果樹	ミカン	1	ミカンコナジラミ(1)
	計	1	
野菜	アスパラガス	1	カンザワハダニ(1)
	イチゴ	5	萎黄病(1)、疫病(1)、ネグサレセンチュウ類(1)、生理障害等(2)
	キャベツ	2	菌核病(1)、菌核病と灰色かび病の混発(1)
	キュウリ	6	黄化えそ病(3)、菌核病(1)、ケナガコナダニ(1)、生理障害等(1)
	ダイコン	1	生理障害等(1)
	タマネギ	5	生理障害等(5)
	トマト	4	褐色根腐病(2)、褐色根腐病と萎凋病の混発(1)、菌核病(1)
	ナス	1	生理障害等(1)
	パセリ	1	灰色かび病(1)
	ピーマン	1	生理障害等(1)
	ブロッコリー	1	べと病(1)
	ミズナ	1	リゾクトニア病(1)
	計	29	
	花き	アスター	1
デルフィニウム		2	灰色かび病(1)、生理障害等(1)
トルコギキョウ		1	立枯病(1)
計		4	

合計： 16 作物
34 件

内訳

糸状菌による病害	: 14件
細菌による病害	: 0件
ウイルス・ウイロイドによる病害	: 3件
害虫類	: 3件
線虫類	: 1件
生理障害等	: 13件
合計	34件

6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に1月24日～2月20日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）				
発信元	内容	日付	作物	病害虫名
岐阜県	注意報	2015/01/28	イチゴ	ハダニ類
長崎県	注意報	2015/02/02	イチゴ	ハダニ類

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）				
発信元	日付	作物	内容	
茨城県	2015/01/27	シソ	シソモザイク病（PMoV）	
愛知県	2015/02/02	食用トレニア、食用金魚草	クロテンコナカイガラムシ	
岡山県	2015/02/10	キュウリ（カボチャ台木）	黒点根腐病	

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

技術情報等（九州地方で発表されたもののみ）				
発信元	日付	作物	内容	
佐賀県	2015/01/29	タマネギ	べと病の防除の徹底について	
佐賀県	2015/01/29	イチゴ	うどんこ病、ハダニ類の防除対策について	
熊本県	2015/02/02	イチゴ	ハダニ類の発生状況と防除対策について	
福岡県	2015/02/18	果樹全般	チャバネアオカメムシの越冬量について	

注：太字は佐賀県で発表されたものを示す

7. 農薬の適正使用を徹底しましょう！

農薬を使用する前に、ラベルの内容を確認しましょう！

農薬の登録内容は変更されることがあります。

使い慣れた農薬でも、ラベル等で登録内容を確認して使用しましょう。

ありや〜！
使えんごとになった。
確認してよかったな〜。



消費者の信頼を裏切らないためにも
農薬を使用するときには細心の注意を！

農作物には「食の安全」が守られるよう、使用できる農薬が定められています。しかし、農産物直売所等に出荷された農産物の中に使用できない農薬が検出されるなどの不適切な事例が見られています。

消費者の信頼を裏切らないためにも、以下の注意事項を守りましょう

① 農薬散布前に、まず、防除器具の洗浄！

以前、使用した農薬が、タンクやホース内に残り、後に別の農薬を使用した際に適用のない作物にかかり、残留農薬基準値を超過する事例が見られています。



(佐賀県・佐賀県植物防疫協会作成パンフレットから抜粋)